

福 岡 県 の 酪 農 経 営

上 原 三 郎

福岡県農業試験場

UEHARA, S. Daily-farming in Fukuoka Prefecture

本県の酪農経営を考察するに当つて先づその発展の経過、牛乳の需要関係、協同組合の活動等に関し検討したい。

本県の酪農は昭和 15, 6 年頃から発展の緒についたが本格的な発展は終戦後のことに属する。それまでは搾乳業者の方がずつと優勢であつたが、終戦後は酪農の発展が目覚しく、昭和 26 年の乳牛飼養戸数及び飼養頭数を 10 年前の同 16 年のそれと比較すると専業は戸数に於て半減し、頭数に於て 4 割に減じ、遂に酪農は戸数に於て 3.6 倍、頭数に於て 7 倍に増加している。(第 1 表)

第 1 表 福岡縣の乳牛飼養戸数並に頭数の変化

	飼 養 戸 数				飼 養 頭 数			
	専業		酪農		専業		酪農	
	戸	頭	戸	頭	戸	頭	戸	頭
昭 3	—	—	—	—	1,470	—	—	—
8	151	—	5	—	1,480	—	28	—
11	155	—	40	—	1,793	—	259	—
16	164	100	386	100	2,542	100	531	100
26,7,20	75	46	1,385*	360	987	39	3,723	701

* 搾乳戸数を示す。

酪農はその生産物である牛乳が腐敗し易いのに新鮮なうちに消費されねばならないところから、集乳と処理と販売は敏速に行われねばならない。従つてそれらのための設備に相当多額の資本がいるし、工場と運轉

する技術者や事務員、更に乳牛の飼養、繁殖、治療等を指導し世話する技術者も必要である。この様な事情から酪農は最初から協同組合組織によつて発達したものが多く、昭和 10 年以後糸島、早良、京都青柳酪農など良き指導者を得て着実に発展を始めていたが、戦争によつて一時挫折し終戦後はこれらの組合はいち早く回復し、昭和 23 年頃には殆んど全県下に郡単位の酪農協が出来、村単位の組合も二、三出来た。昭和 25, 6 年には小倉市に西日本酪農連(4 市 2 郡)、福岡市に福岡県酪農連(1 市 6 郡)が設立され何れも 50 石以上の処理能力を有する最新の設備を有している。昭 26, 11, 30 現在で県下の処理所は 72 ケ所あり、その中酪農協の処理所が 20 ケ所あるがこれらの多くは単なる集荷輸送機関と化しつつある。

生乳の集荷範囲は消費中心から大凡 30km の半径の中に入る。然しこの供給圏は益々拡大する傾向にある。今年になつて佐賀、大分両県から 1 箇月 1,000 石内外(1 日平均 30 石)の乳が県内に入つている。

県内の主な消費地は大體 5 つあり、それを中心として 5 つの酪農地帯を区分することが出来る。第 2 表は地帯別の乳牛分布状況であり、第 3 表は集荷及び消費状況を示している。

次に 5 地帯の消費人口(主食の配給を受けている人口数)を見ると福岡地方 57 万、北九州地方 75 万、筑豊地方 54 万、久留米地方 15 万、大牟田地方 25 万でこれに対して昭 26, 10, 30 の 1 日の生乳の消費量は第

第 2 表 地帯別にみた乳牛の分布状況

地 帯	酪 農 飼 養			専 業 者 飼 養			両 者 の 合 計			両者飼養の		A C	B C
	搾乳中 のもの	搾乳し ていな いもの	計(A)	搾乳中 のもの	搾乳し ていな いもの	計(B)	搾乳中 のもの	搾乳し ていな いもの	計(C)	子牛 種牝牛			
										× 100	× 100		
福 岡 地 方	906	407	1,313	108	55	163	1,014	462	1,476	235	15	89%	11%
北九州地方	710	386	1,096	271	124	395	981	510	1,491	184	20	74	26
筑豊炭坑地方	251	75	326	138	59	197	379	134	513	61	7	62	38
久留米地方	638	289	927	132	64	196	770	353	1,123	205	11	83	17
大牟田地方	46	15	61	25	17	42	71	32	103	17	1	59	41
合 計	2,551	1,172	3,723	644	319	993	3,215	1,491	4,706	702	54	79	21

第 3 表 牛乳の集荷及び消費狀況 (昭 26.11.30 1日分)

	市内又は 郡内 集乳量	郡部 より 受入	他地方 より 受入	縣外 より 受入	計	市内又は 郡内 消費量	バター 加工	市、郡 外へ 送	輸 送 先
福岡地方									
福岡市	5,913	27,546	15,505	5,301	54,265	50,191	4,074	—	—
早良区	7,031	—	—	—	—	1,500	—	5,235	縣外へ
東区	4,418	—	—	—	—	—	—	4,418	〃
南区	4,868	—	—	—	—	2,698	—	2,200	〃
中央区	13,010	—	—	—	—	4,330	—	7,840	〃
北區	5,435	—	—	—	—	965	—	4,470	〃
小計	50,777	—	15,505	5,301	71,583	60,034	4,074	4,200	〃
宗像郡	10,072	—	—	—	—	350	—	1,200	青柳酪へ
								3,762	西日本酪へ
								560	八幡, 若松へ
小計	50,777	—	15,505	5,301	71,583	60,034	4,074	29,563	福岡市へ
								4,322	北九州へ
北九州地方									
若松市	800	—	500	—	1,300	—	—	—	—
八幡市	3,297	1,189	60	2,472	7,018	—	—	867	下関へ
小倉市	13,230	15,068	3,762	—	32,060	42,873	—	580	行橋へ
門司市	2,600	—	—	—	—	—	—	80	遠賀郡へ
遠賀郡	1,760	—	—	—	—	1,760	—	—	—
京都郡	20,646	—	—	—	—	1,848	—	15,068	西日本酪へ
築上郡	3,890	—	—	120	—	700	—	3,730	田川へ
小計	46,223	—	4,322	2,592	53,137	47,181	—	610	八幡へ
								2,580	西日本酪へ
								18,258	北九州五市へ
筑豊地方									
直方市	2,713	—	—	—	2,713	2,713	—	—	—
飯塚市	10,167	—	—	—	10,167	10,167	—	—	—
田川市	2,995	—	3,730	—	6,725	4,475	—	2,250	福岡市へ
小計	15,648	—	3,730	—	19,378	17,355	—	2,250	—
久留米地方									
久留米市	5,670	8,900	—	—	14,530	9,200	1,070	4,800	福岡市へ
								500	三潁, 八女郡へ
								3,480	福岡市へ
三井郡	8,430	—	—	—	—	1,820	—	400	大牟田市へ
								400	久留米, 甘木へ
浮羽郡	4,063	—	—	—	—	1,740	—	2,323	福岡へ
三潁郡	4,500	—	—	—	—	1,500	—	2,500	久留米へ
								500	大牟田へ
								1,365	久留米へ
八女郡	2,737	—	—	—	—	1,219	—	115	大牟田へ
								50	柳川へ
小計	25,400	—	—	—	25,400	15,509	1,070	10,603	福岡市へ
								1,015	大牟田市へ
大牟田地方									
大牟田市	350	3,900	3,000	4,500	11,750	9,732	—	1,145	熊本縣へ
山門郡	3,900	—	900	—	4,800	1,200	—	—	—
三池郡	—	—	—	—	—	573	—	—	—
小計	4,250	—	3,900	4,500	11,750	11,505	—	1,145	縣外へ
全縣下合計									
	142,298	—	—	12,393	154,691	151,584	5,144	2,012	—

3表の如く福岡地方 60 石 (内福岡市 50 石), 北九州地方 47 石 (内五市 42 石), 筑豊 16 石, 久留米 15.5 石 (内久留米市 9 石), 大牟田地方 11.5 石 (内大牟田市 9.7 石) 計 152 石である。消費人口 1 万に対する消費量をみると, 福岡及び久留米地方は大体 1 石, 北九州 0.7 石, 筑豊 0.7 石筑豊 0.3 石, 大牟田 0.4 石で商業都市に比べて工業, 炭坑地帯が著しく少いことは労働者の生活水準の低さを反映するものと思われる。然し乍ら労働者の所得の増加, 栄養知識の向上によつて今後はこれらの地帯の消費量は益々増加するであろう。

第3表はまた生乳の集荷状況をも示している。即ち福岡市は市内生産は 6 石に過ぎず, 周辺の郡部より 27.5 石, 久留米より 15.5 石, 県外より 5.3 石を入れている。北九州は 4 市で 20 石を出し, 佐都, 築上 2 郡で 24 石, 大分県中津より 0.9 石, 日田より 1.6 石を入れ, 遠賀, 宗像より 3.8 石を入れている。筑豊地方は京都郡より 3.8 石を入れるが余乳 2.2 石を福岡へ再輸送している。而もこの地方は酪農の占むる地位が他地方に比べて低い(第2表参照)。久留米地方は 10.6 石を福岡市へ, 1 石を大牟田市へ出している。大牟田地方は山門郡で 4 石を供給し, 残り 4.5 石を熊本県から入れ再び 1.1 石を熊本県(荒尾市)へ出している。

第4表は昭 22 以降の本県における牛乳の消費量の推移を示しているが, 特に今年(昭27)に入つて6月

第4表 福岡県における牛乳の消費量の推移

	総量	内 訳				県外より移入
		市乳	バター加工	自消	家費	
昭 22	8,608	8,000	—	608	—	
23	14,694	12,969	—	1,599	126	
24	24,086	21,741	—	2,035	310	
25	35,001	31,878	684	2,439	—	
26	55,621	44,403	1,006	3,777	2,430	
27. 1~6	43,687	32,759	1,763	3,292	5,873	

迄で既に前年 1 ケ年分の 8 割を消費し, 県外より 6,000 石, 月平均 1,000 石 (1 日平均 30 石) を移入している。

以上の需給状況より察すると県内の牛乳消費量は漸増の一途を辿るものと思われる。確かにこのことは本県の酪農業にとつて希望を与えるものである。恐らく昭和 30 年には乳牛頭数 1 万頭, 牛乳の生産量 1 日 350 石程度には増加するであろう。

需要量の増加が見込まれるに拘らず, 乳価の季節的変動はかなり著しく, これがため資金に乏しい酪農経営の運営に支障を来し易い。また最近の乳価の動きを見ると飼料の値上りに少し遅れて上つてきている。然し昭 15-27 の飼料の騰貴率が 2~3 倍であるのに, 乳価(小売価格)は昭 25 年 10 円, 26 年 13 円, 27 年 15

第7表 酪農協同組合概況 (1) (昭和25年度)

組 合 名	正組合員	准組合員	理 事		監 事	職 員
			常 勤	非常勤		
福岡市酪農	43	3	—	7	3	?
早良	85	17	—	9	3	会計主任 1 その他 1 事務員 2
糸島	337	—	1	13	4	参事 1 専任技術員 4 事務職員 3 その他 10
糸朝	169	—	1	10	5	参事 1 専任技術員 1 会計 1 その他 3
粕屋中央	34	—	—	5	2	職員 1 その他 1
青柳	101	—	2	14	5	兼任技術員 1 事務職員 1 その他 10
篠栗(粕屋)	34	—	—	5	3	職員 4
北九州	61	—	—	6	3	事務職員 1
京都	528	403	3	23	5	専任技術員 3 その他職員 11
築上	26	28	—	7	3	嘱託 3
嘉穂	34	—	—	6	3	?
田川	31	—	—	8	3	?
英彦	15	12	—	5	3	?
三浮	176	—	—	16	5	参事 1 会計主任 1
三浮	31	—	1	7	—	その他職員 4
八女	126	—	2	10	—	その他職員 4 その他 5
古川	72	—	—	5	3	?
三浮	54	—	—	7	3	?
大牟田	?	—	—	6	3	?

備考: この他西日本酪農, 福岡県酪農は夫々出資金, 資本金約 2,000 万円, 1,500 万円であるが事業成績不明。

第 5 表 福岡縣における乳價の動き (縣畜産課調)

	26. 11. 30			27. 7. 20		
	最 高	最 低	平 均	最 高	最 低	平 均
原料乳(生産者支拂價格)	7.00	4.00	5.50 ~6.00	9.00	5.00	7.00 ~7.50
卸 賣 價 格	10.50	6.00	9.00 ~10.00	13.00	8.00	11.00 ~12.00
小 賣 價 格	14.00	8.00	12.00 ~13.00	15.00	10.00	13.00 ~15.00

第 6 表 主要飼料の小賣價格の動き (全國平均, 中味 60kg, 農林省畜産局調)

	大豆粕	同 指 数	藪	同 指 数	米 糠	同 指 数	混合麦糠	同 指 数
25. 3. 31	1,198 ^[1]	100	471 ^[1]	100	494 ^[1]	100	344 ^[1]	100
" 8. 15	1,830	156	735	156	780	158	440	128
26. 1. 15	2,467	206	1,194	253	1,059	214	669	196
" 6. "	2,350	205	1,180	250	1,280	220	710	206
" 11. "	2,480	207	1,630	346	1,440	255	1,130	328
27. 3. "	2,510	209	1,690	356	1,530	306	1,310	380
" 7. "	2,708	226	1,424	302	1,392	247	992	289

円と 1.5 倍の上昇に過ぎない。所謂乳価安、飼料高のため実質的には酪農所得は低減せざるを得ない。經營の合理化による原料乳の生産費の引下げ、流通過程の諸経費の節減が今後の酪農の課題でなければならない。

酪農家は殆んど凡てが酪農協に加入しているが、県下 20 の酪農協の事業状況は二三の組合を除いて余り香しくない。第 7 表は昭 25 年度の事業成績報告であるが、大部分の組合は出資額も少いが払込済出資額に数倍する長期並に短期の借入金があり、また役員の数

第 7 表 酪農協同組合概況 (1 につづく)

貯 金	借 入 金		拂 込 済 出 資 金	販 賣 事 業 直 接 収 入	購 買 事 業 直 接 収 入	そ の 他 事 業 収 入	人 件 費	欠 損 金
	長 期	短 期						
—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	2,060,000	698,000	2,483,000	—	—	?	7,500
4,820,000	—	—	4,490,000	21,504,000	5,595,000	—	?	—
—	800,000	—	1,670,000	15,783,000	—	—	?	—
—	—	2,420,000	300,000	6,676,000	1,853,000	—	350,000	—
—	3,000,000	3,924,000	1,690,000	12,726,000	5,364,000	加工 2,247,000	?	—
—	—	1,587,000	1,105,000	8,164,000	—	—	458,000	—
—	—	?	?	?	?	—	—	—
2,146,000	—	—	16,030,000	49,600,000	24,590,000	信用 547,000	?	?
—	—	400,000	87,000	—	—	利用 269,000	?	—
—	?	?	?	20,043,000	—	—	—	—
—	?	?	?	?	?	?	238,000	2,478,000
—	—	179,000	74,000	736,000	—	—	?	?
—	2,260,000	100,000	731,000	16,224,000	—	—	?	737,000
—	2,550,000	10,000	950,000	?	?	?	960,000	—
—	2,380,000	340,000	595,000	2,764,000	456,000	—	180,000	—
—	—	234,000	78,000	—	—	—	239,000	—
—	?	?	?	?	?	—	?	—
—	?	?	?	?	?	—	?	—

も組合数に対して不釣合に多く、雑費や人件費や借入金利息に僅かの利益を食われているのが現状である。のみならず管監官庁が酪農協に信用事業を営むことを原則として許可しない方針をとつているために、何れの組合も資金難に悩み、経営が円滑にいかないのである。即ち設備や運搬機関、種牡牛の設置等の長期資金はもとよりのこと、組合員への月々の牛乳代金の支払、飼料薬剤等の共同購入、人夫賃の支払等の短期資金すら外部から借入れざるを得ない状態である。

個々の組合員の経営は酪農協にその存立の基礎を置かずしては成立たない程に、組合員と酪農協との関係は普通農協の場合と比較にならぬ程密接な利害を有している。酪農経営と酪農協とは運命を共にするといつても過言ではあるまい。従つて酪農協の強化に対する行政的指導と援助は特に必要であると思う。

組合自身も酪農経営のこのような特質を認識して協同事業をより立てる努力が必要である。然るに特に牛

乳の販売事業に於ては酪農協は商業資本との競争におされ勝となる傾向が見られるし、農家もまた牛乳会社に引きつけられようとする傾向がある。酪農協がこれらの牛乳会社と競争してゆくことは容易でないと思われる。福岡市に於ては県酪農協連（昭 29, 11, 30, 集乳量 34.4 石）の外に日本酪農 K K（6 石）、昭和牛乳（7 石）、福岡牛乳（3 石）があり郡部からは青柳酪農協（出荷量 3 石）、三井郡赤坂牧場（3 石）浮羽郡高尾牧場（1.3 石）などが直接販売しており、北九州でも西日本酪農協連（同日集乳量 26 石）の外に中央乳業 K K（7 石）、八幡牛乳（7.2 石）、若松ミルク（1.3 石などがあり、消費地における販売戦は、原料乳の獲得競争が今後も益々激化するであろう。酪農協の将来は決して楽観を許さない状態にあり、組合員の酪農経営もやがて商業資本との対決を迫られてくるであろう。